

# 【ねがいはましては】

平成24年3月23日

KYOWA SCHOOL

第257号

「家族と現実社会」

最近の新聞の記事に、大卒の48%、高卒の32%、中卒の11%、という数字が出ていました。これは就職して3年後、まだその会社を辞めずにいる割合だそうです。大学を出ていながら、半分以上の方が3年持たずにやめてしまったということになります。理由はいろいろあると思います。一概に「これだ」と絞り込むのも無理でしょう。

私なりの私に置かれた環境から推察できること・・・。

「学校と社会との壁の厚さ」を、まず初めに掲げます。学校という壁の中で6年・3年・3年の合計12年、成績というひとつの評価に苦しめられながら生活してきた彼らの中には、社会がどのような構造になっているか、働くとはどういうことなのか、生きるとはどういうことなのか、真の意味を感じ得せずに大学へ、社会へと旅立っていきます。大学と言っても、最近の調査によると、全く勉強をしない学生もかなりいるとのこと。大学とは専門分野をより深く学得する世界であると認識していますが、どうやらその意義もぐらついている様子です。

子どもたちを見ていると、男子・女子、どちらかという精神的に弱いのは男の子かなと感じてしまいます。その理由として、なかなか自分の思いや考えを表現できなかったり、行動に取れなかったり・・・。内にこもってしまう割合からすると、男の子のほうが多いと思ってしまう。

成績至上主義になりがちな今の教育制度ですと、中学校へ行けば毎回発表される定期テストの順位や通知表が幅を利かせすぎてしまい、その子自身が現実社会や世界へ目を向ける機会が少なくなってしまうことが原因の一つであるのかもしれない。

一に勉強、二に勉強、三、四も勉強五も勉強、空いた時間は部活かゲームオンリー・・・。家族との会話や、家族との外出、また、友だちとの外出、そしてきざっぽく旅・・・。学校以外に目を向ける機会がますます少なくなっていることも、原因の一つであるのかもしれない。

口蹄疫で大被害を受けた九州地方の方々の暮らし、東日本大震災で未だに不自由な生活をされている方々、日々、満員電車で揺られ、残業手当もなく毎夜11時過ぎの帰宅。社会で必死に生きていらっしゃる方々の生活とは程遠い世界が毎日続きます。安全に生活できる場としての学校の役割は大きいのですが、就職というひとつの壁が違っただけで、全く違う人々との感情の交錯が、彼らを「こんなはずじゃなかった。」と、気がつかせます。

私は時折、子どもたちの中に前向きでない子がいたりしますと、こんなことを言います。「中学卒業したら、まず、九州の口蹄疫でそっくり生きる糧を失われた酪農家の方々のところで働いておいでよ。生きるってどういうことなのか、肌で感じてきなよ・・・。」

今の生き様が、いかに「罪」であるか気がつくことが先決。そこからなぜ勉強するのか、なぜ進学するのか・・・。

人のあり方を人から教わるのではなく、自分が目の当たりにすることが大切だと思います。特に男の子の場合は、体力的にもますます充実を重ねる年頃、自宅でゲームに興じるすがたをご覧になるご両親の心中は察するに余ります。

半月ほど前の新聞でしたか、こんな記事がありました。東関東大震災が起こって数週間、毎日のように被災地で活躍される自衛官の姿が大きくクローズアップされていました。その姿を見、自衛官に今までにない親近感を感じ、将来は自衛官になろうと志す若者が増えるのではないかと・・・。結局ふたを開けてみると、あまり志望者は増えていなかったとのこと。その理由のひとつが、親の反対なのだそうです。きつい・汚い・危険の3K的職業には我が子を就かせたくないということで、反対されるのだそうです。また、その意見をすんなり聞き入れてしまう若者たちも若者たち、あいた口がふさがらない状態でした。

毎日汗まみれになって帰ってくる父の姿、その父が懐から取り出す現金1万円。そのお金のおかげで生活できる・・・。

銀行振り込み月給80万円のお父さんが、毎日一杯引っかけて飲んだくれて帰ってくる姿。同じ父でも子に映ってしまう父の姿は天と地ほどの違いがあります。

どんなに高給取りの父であっても、どんなに綺麗なお母さんであっても、子は常に家族を敬いの目で見たいと願っているはず。 「お前は良い成績を採ってくればいいんだ。」では、あまりにも寂しすぎます。

子が成績を本気で上げようとする瞬間があります。家族をこころから尊敬する瞬間です。「私の家はそんなにお金持ちではないけど、でも、世界で一番仲の良い家族です。」なんて、自己紹介のときに発言できてしまうお父さんは何人いるのでしょうか。そのひと言を言っただけのお子さんの成績は・・・？

簡単に想像できるはず。取りたくてとっているのではなく、家族への想いが自然にそうさせているだけ・・・。

「私の行っている塾は、世界で一番家族的で、仲の良い教室なんです。」なんて言っただけの子が結構いるのかな。なんてしっかり思える教室へ、ますます大きく舵をとってまいります。

やっぱり落ちつくところは・・・家族の時間、大切になさってください。「七夕家族」（1年に1回くらいしか家族団欒のときがもてない）などと言われても、その一瞬が素晴らしい思い出の時になることを、こころから望んでいます。

さあ今日もどんな家族の姿があるのかな・・・わが教室、みんな、ありがとうね。